

令和4年度北区民まちづくり会議 ワークショップ摘録

<A「子ども世代」グループ>

	氏名	所属等
1	中井 美樹	立命館大学 産業社会学部教授
2	岡本 良一	みんなでつくる安心安全なまち北区推進協議会会長
3	東 嘉月	北区保育園園長会会長
4	藤原 晋也	小学校 PTA 北上支部副理事校（北区代表）
5	岸本 洋介	中学校 PTA 北・上支部理事校（北区代表）
6	谷口 みゆき	北区「おやじ・おふくろの会」連絡会 会長
進行	西原まちづくりアドバイザー	

○ action01

公園などを活用しながら、地域と子どもが関わるができる機会をつくります

○ action02

子どもたちが多世代と共に安心して過ごすことができる居場所をつくります

○ action03

子どもたちが北区の様々な人、仕事や暮らし、文化に触れる機会をつくります

<摘録>

○ actionの現状・課題

- ・ 子どもたちの遊び場は近所の公園くらい。
- ・ 夏休みは、鴨川やせせらぎ公園での親子の姿が目立った。
- ・ 昔は、駄菓子屋や路地で子ども達が遊んでいた（現代では、自由に遊ぶのは困難）。
- ・ 公園や鴨川での禁止事項が多い。
- ・ 親の目が届く範囲でしか活動できない。
- ・ 気候変動（熱中症などへの不安）
- ・ 共働きも多く、家で過ごす子どもも多い（子どもだけで外出させにくい）。

○ actionの推進に向けた意見

- ・ 人目がある安心な環境を作ることができれば、子どもがもっと遊べる。
- ・ 子どもに限定せず、親子で楽しめる場があると、気軽に参加しやすい。
- ・ 子どもと親と一緒に過ごし、それぞれに楽しめるイベントや場所を増やしたい。
- ・ マルシェなどのイベント会場で、子どもだけで巡ったり参加できる安心な環境を作る。
- ・ 体験イベントも増えているので、親子で楽しめる機会を増やす（上京の子どもまつり）。
- ・ 親同士の交流も促すことで、子育ての不安や孤立の解消にもつながる。
- ・ action03と絡めて、親子での文化・芸術体験を増やす。
- ・ 餅つきも文化体験になるし、簡単な木工体験に北山杉を活用したりもできる。
- ・ action02と絡めて、居場所活動に体験プログラムを提供する。

- Web で共有できる遊び場 MAP を作りたい。
- 近場の遊び場情報（学区外）はあまり共有されていない。
- 学区によっては、公園が一つしかない。
- 子どもが遊べる場所を探しているが、まとまった情報として整理されていない。
- 北区は学区ごとに特徴があり多様な魅力があるので、北区全体の遊べるスポットを紹介する。
- 公園だけでなく山や川も遊び場になる（太田の小径・紫明せせらぎ公園など）。
- 対象を未就学児～小学生に絞った魅力の発信。
- 情報は整理しすぎず、利用者による口コミなどを共有できると伝わりやすい。
- イベントの告知や、親の過ごし方なども提供できるといい。

<B「働き世代」グループ>

	氏名	所属等
1	赤澤 清孝	大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科准教授
2	高奥 英路	北区地域代表者会議会長
3	山本 暢彦	京都中葉企業家同友会北支部副支部長
4	石川 裕也	京都北山丸太生産協同組合理事長
5	石本 浩治	京都市地域の空き家相談員
6	村上 夏希	市民公募委員（村上牛乳店）
進行	田尾まちづくりアドバイザー	

○ action01

これまでに培われてきた多様な経験やスキルをまちづくりや社会貢献につなげる仕組みをつくります

○ action02

楽しく健康であり続けるために、まちでの学びや交流を育む機会をつくります

○ action03

北区に住み、働く人の暮らし方や仕事を知る機会をつくります

<摘録>

○ actionの現状・課題

- ・ 働き世代の、特に子育て世代に対して「雇用」が大切。
- ・ 働き世代は、地域活動の優先順位は低い。
- ・ 北部山間地に働き世代を呼び込みたいが、林業は安定しておらず雇用は難しい。
- ・ 林業は環境面にも影響するので、なんとか雇用を増やしたい。
- ・ 働き方も変わってきていて、時間的な余裕も出てきている。
- ・ 働き世代の上限年齢が上がってきている。
- ・ 働き世代のなかの子育て世代は、子ども中心になる。
- ・ イベントは結構あるが、届いていない。
- ・ イベントの参加という最初の一步目のハードルが高い。

○ actionの推進に向けた意見

- ・ 働き世代をうまく“つかう”。
責任はとるので、任せるというスタンスだと、働き世代がやる気になる。
- ・ 地域活動の優先順位を上を上げていく。
- ・ 人材は埋もれているので、例えば、子どもと一緒にイベントに参加しているところから一本釣りするなどがよい。
- ・ お酒を飲む機会があるとよい（特に男性）。
- ・ やっていることを知ってもらう。例えば、ホームページ、SNS、チラシの各戸配布。
- ・ 働く人を増やしたいのであれば、働く場所を増やしたり、起業・創業の支援。
京都は個人店が多いが、もっと増やしたり続けるための支援が必要。
- ・ 魅力的なイベントがあれば、つながりが生まれる。

- 働き世代のなかのいろいろな世代が融合できるとよい。また、北区は大学が多いので、留学生も融合させるとよい。
- 子どものイベントで、親同士のつながりをつくってくれる仕掛けがあるとよい。
- 子育てが終わった世代は、飲みに行くというような出会い方があるとよい。
- 働き世代の独身の人たちが地域で出会える場があるとよい。
- 体育振興会の活動など、既存の場をもっと活用する。
- 市の広報板はハードルが高い。協力してくれる個人宅や会社などに、半公共的な掲示板をつくる。

○ まとめ

- 雇用や働く人（起業）を増やす。
- 働き世代がもっと参加しやすいイベントを行う。また、今あるイベントなどを、SNSやホームページ、まちの掲示板などでもっと知らせる。

<C「障害のある人」グループ>

	氏名	所属等
1	藤松 素子	佛教大学社会福祉学部社会福祉学科教授
2	堺 紀恵子	北保健協議会連合会会長
3	國安 紗世	ちょう結び管理者／てーげー食堂代表
4	寺田 敏紀	西陣 R 倶楽部事務局次長
5	山本 たろ	社会福祉法人京都ライトハウス障害支援部部長
進行	藤井企画係長	

○ action01

災害時に障害に対応した避難ができるように普段からの備えを充実します

○ action02

障害のある人と出会う機会をつくります

○ action03

障害のある人とない人が互いに理解を深めながら、交流できる環境をつくります

<摘録>

○ actionの現状・課題

- ・ 福祉施設は市から福祉避難所の指定を受けているが、有事の際に障害者に応じた避難や対応について、施設の受入体制、地域等における要配慮者の把握、避難所からの移送に係る地域の支援や移送方法など懸念点が多い。
- ・ 特に地域において障害者の把握若しくは障害者に必要な支援の把握ができていないと思う。加えて、障害者側が地域に対し声を出しにくい状況にある。
- ・ コロナ禍によるイベント等の中止・延期により、障害のある人の活躍等を知る機会が無くなっており、SNS等を通じた広報に務めている。
- ・ コロナ禍において地域との接点は希薄になっており、可能な限り“つながり”を創出したかったが、対象が要配慮者でもあること、地域の考えなどから、思うような活動はできていない。

→ 障害の有無に関わらず、住民間の“つながり”の希薄化（地域コミュニティの衰退）がactionの現状・課題を表している。特に自治会・町内会などの地域コミュニティについては、何がために存在しているのか、どのようなメリットがあるのかを住民が意識・遡及できていない側面もあり、“つながり”衰退・希薄化に繋がっている。

○ actionの推進に向けた意見

- ・ 住民間の交流が活発になったり、自治会・町内会などの地域コミュニティにおいては、地域活動や組織の在り方など、意見交換や交流が進めば、地域から地域に住む障害者にも配慮が及び、交流が生まれ、互いが支え合い暮らしていけるのではないか。
- ・ 町内の若手にも率先して地域活動に参加してもらおうと、新しい考えや活動が生まれ、“つながり”も生まれる。